

平成27年度スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール研究実施報告（第2年次）（概要）

1 研究開発課題	
ソリューションフォーカスの視点に立つスーパー・プロフェッショナル・ケアワーカーの育成	
2 研究の概要	
<p>(1) ソリューションフォーカスの視点に立つケアワーカーの育成方法の研究</p> <p>① 主体的かつ協働的に課題に挑む力をつけさせるためアクティブラーニングを全校的に取り組む。</p> <p>② ICFの視点に基づいた「利用者本位の介護」を目指した、介護技術・技能の研究及び、その達成度の尺度となる評価方法の研究。関連科目である生活支援技術、介護実習、介護過程の効果的かつ融合的な教授法を研究する。</p> <p>③ 効果的な授業展開を図るためにICTの活用、とりわけタブレット活用方法について研究する。</p> <p>(2) ピアスーパービジョンにより、課題解決等についての自主性・主体性を育てる方法の研究</p> <p>① 「チーム」「協働」「コミュニケーション力」に焦点を置き、困難な課題にも立ち向かって解決していこうとする態度を育成する。</p> <p>② 科行事の内容精選とともに、行事の目的や指導法を改善する。</p> <p>③ 科行事がどのように生徒に刺激を与え、自己有用感を与えるかを検証する。</p> <p>④ 官民との連携や校内の他学科との連携などにより研究を深化させる。</p> <p>(3) 介護の質を高める医療的ケアの「生活支援技術」指導法の研究</p> <p>① 喀痰吸引や経管栄養など高度な医療的分野について、効果的な教授法を研究する。</p> <p>② 技術、技能の到達度を測る評価法の開発と改善を行う。</p> <p>(4) 高度な介護技術を習得させるための指導法の研究と検証</p> <p>① より高度な刺激を与えるために、応用的な技法でかつ利用者主体の「楽ワザ介護」の指導法を取り入れ、生徒に対してどのような効果があるかを検証する。</p> <p>② AJCC（オールジャパンコンテスト）を参考に、高校生の介護コンクールをより実践的なものに、かつ教育効果のあるものに改善する。</p> <p>③ 現場見学実習や専門家を招聘して、技術講習会や講演会を実施し、その効果を検証する。</p>	
3 平成27年度実施規模	
総合福祉科を対象として実施した	
4 研究内容	
○研究計画	
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ・ ICTの活用、医療的ケア、応用的介護技術の導入等を推進するために、機材や教材等の整備を行う。タブレットの活用方法の研究を行う。 ・ 技術、技能面の向上とともに、ICFの視点に基づく評価法を検討、作成する。
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ・ アクティブラーニングの全校的取り組みを推進していく。 ・ ICFの視点に基づく評価法の完成と検証の開始。 ・ タブレットの活用方法の研究の継続。 ・ 介護技術・技能（医療的分野を含む）の評価法の完成と検証の開始。
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ・ 介護技術や技能に大いに自信を有し、福祉への高い誇りを有したケアワーカーを育成する。ICFの視点に基づく評価法や介護技術評価法を継続して成果を図る。

- ・ ICFに基づく教材開発と指導書、医療的ケアの教材開発と指導書の作成。
- ・ タブレット等を活用したWeb会議・交流を行い、より教育効果の高い教授法について研究を深める。

○平成27年度の教育課程の内容（平成27年度教育課程表を含めること）

全日制の課程			本校					単位数	計	備考	
総合福祉科			1学級	介護福祉類型 (医療福祉類型と合わせて 1学級)			計				備考
教科	科目	標準単位数		1年	2年	3年		計	備考		
			必修	必修	選択	必修	選択			備考	
			30	28	2	28	2	備考			
国語	国語総合	4	2	2					4	7・9	
	現代文B	4				3		3			
	古典A	2					2	0・2			
地理 歴史	世界史A	2				2		2	4		
	日本史A	2		2				2			
公民	現代社会	2				2		2	2		
数学	数学I	3	3					3	3		
理科	科学と人間生活	2		2				2	4・6		
	生物基礎	2	2					2			
	化学基礎	2					2	0・2			
保健 体育	体育	7～8	3	2		2		7	7		
	保健	2						0			「こころとからだの理解」で代替
芸術	音楽I	2			2			0・2	2		
	美術I	2			2			0・2			
外国語	コミュニケーション英語I	3	3					3	3・5	学校設定科目	
	異文化理解					2		0・2			
家庭	家庭基礎	2		2				2	2・4	学校設定科目	
	日本の伝統文化	2					2	0・2			
情報	情報の科学	2						0	0	「福祉情報活用」で代替	
工業	実習	4～21						2	0・2	学校設定科目	
	アプリケーション応用	2						2			0・2
	色彩入門	2						2			0・2
商業	ビジネス情報	2～8						2	0・2	0・2	
家庭	フードデザイン	2～6						2	0・2	0・2	
福祉	社会福祉基礎	2～6	2			3		5	54		
	介護福祉基礎	2～6	3	2				5			
	コミュニケーション技術	2～4		2				2			
	生活支援技術	2～12	3	4		4		11			
	介護過程	2～6		2		2		4			
	介護総合演習	2～6	1	1		1		3			
	介護実習	2～14	4	4		5		13			
	こころとからだの理解	2～10	4	3		2		9			
福祉情報活用	2～4				2		2				
看護	看護入門II	2～4					2	0・2	0・2		
総合的な学習の時間		3～6						0	0	「介護総合演習」で代替	
各学科に共通する各教科・科目の単位数計			13	10	2	9	0・2	34・36	0・2	主として専門学科において開設される教科・科目の履修単位数	
主として専門学科において開設される各教科・科目の単位数計			17	18	0	19	2・0	56・54	2・0		
科目単位数計			30	30		30		90		福祉科目 54 単位	
ホームルーム活動週当たり時数			1	1		1		3			
週当たり授業時数			31	31		31		93			
始業時刻・終業時刻始業時刻：8時25分終業時刻：15時15分(ただし、週1日のみ16時20分)											

- ・ 文部科学省高等学校学習指導要領と厚生労働省介護福祉士養成カリキュラム(福祉系高等学校)に基づいた教育課程による教育活動を実施している。

○具体的な研究事項・活動内容

<研究事項>

(1) ソリューションフォーカスの視点に立つケアワーカーの育成方法の研究

応用的なソリューションフォーカスの視点を身につけさせるためには、その土台となる力すなわち、与えられた様々な情報から、主体的にあるいは協働で課題を発見（気づく）し、困難な課題に対しても仲間と協力するなどして解決策を見出す力を育てることが重要である。またそれを他者に対して表現する力もつけさせていく必要がある。

この土台のもとに、ソリューションフォーカスの視点の基となる「ICF（International Classification of Functioning）」の考え方を積極的に授業に取り入れ、視点を変えることによっていかに利用者のニーズに応えていくかという「利用者本位の介護」へと生徒の意識を変えていく。また、生徒の意識変革を推進するために、ICFの視点に基づいた教材開発と自主的かつ協働的な学習を推進するためにタブレットを使用し、その活用方法も同時に研究する。

①「生活支援技術」

- ・介護のICFに基づいた教材開発を行う。
- ・グループワークやペアワークなど協働して取り組む等のアクティブラーニング手法を取り入れた授業開発を行う。
- ・タブレット活用して授業（校内実習での実技指導）がより円滑にかつ効果的に実施できるように、その活用方法を研究する。内容としては、(ア) これまで授業内で行っていた模擬指導（デモンストレーション）を事前にタブレットで確認することができるようにする。(イ) 授業時や放課後等の練習時に、自己の実技演習をタブレットに収め、学校や自宅で再確認できることで、自己の欠点を知り修正することができるようになる。(ウ) タブレットの活用によって生徒の意欲や技術力の向上等、その有用性を研究する。

②「介護実習」

- ・福祉施設との連携を強化し、ICFの視点に基づいた実習が行えるよう協力を要請する。
- ・ICFの視点に沿った自己評価表を作成し、実習が介護技術や技能の向上に役立つとともに「利用者本位の介護」への意識変革に繋がったかを研究する。

③「介護過程」

- ・「介護実習」において、収集した利用者のアセスメント情報を基に「利用者本位」の視点に立った介護計画を作成する能力を育成する。
- ・従来生徒は3年の介護実習において原則1人の利用者のみを担当するため、卒業するまでに介護計画は利用者1人の作成のみであったが、福祉施設の協力のもと提供された利用者情報から、チームで協働して、他施設の利用者の介護計画について立案させることで、生徒の経験値を増やし自信を持たせる。またそのための、タブレットの有効活用を研究する。
- ・ICFの視点に立った評価法を作成するとともに、立案された介護計画が利用者本位の介護になっているかを評価し、再アセスメントや再立案に活かしていく。

(2) ピアスーパービジョンにより課題解決やサポート等についての自主性・主体性を育てる方法の研究

より良い介護すなわちICFの視点に立った介護をするためには、持てるコミュニケーション能力を十分に発揮し、他職種と連携しながら協働で行っていくことが重要である。職場においてより良い人間関係を構築していくことは、離職率を下げる重要な要素であると考えられる。

この分野では、「チーム」「協働」「コミュニケーション」という所に焦点を当て、課題発見や解決に向けて、仲間と協力しながら、困難な課題にも立ち向かっていく態度や力を養うための研究を進める。また、本校の他学科とも連携協力しながら研究を進めていく。

従来行ってきた行事について内容を精選し、「生徒の成長のための行事」になるように方向性を統一していく。全ての行事の目的性や成果・課題を分析し、生徒にとって、自主性や主体性そして協働性や協調性、さらには高いコミュニケーション能力を身につけるものとしていく。行事ごとに自己評価・相互評価を行い、有効であったかどうかを研究し、生徒が自信を持てるような行事に改善していく。(具体的な取り組みや事業は報告書で)

(3) 介護の質を高める医療的ケアのための「生活支援技術」指導法の研究

医療的ケアの授業に関する教員要件として、看護師資格を要し実務経験5年以上で、かつ文部科学省主催の認定講習を受けた者に限られている。すなわち、教員免許を持たない看護師が授業を展開しなければならない現状が少なからず考えられる。本校においても実習助手が条件をクリアしているため、指導にあたっているが、授業に向けての不安は大きい。また、医療的ケアの知識や技術を単に伝達するだけでなく、学習指導要領に基づいた授業方法や、課題発見や課題解決能力の育成などのアクティブラーニングの考え方を授業に取り入れていく必要があると考えた。

そこで本研究においては、教育的視点に立った学習指導案の作成を積み重ねつつ、教員(指導者)自身のスキルアップを図るとともに、課題を整理し、全国の高等学校に紹介できる指導案や指導方法を開発する。また喀痰吸引や経管栄養についての授業展開や指導方法が確立しているので、看護科からの指導助言を仰ぎながら研究を進めていく。

(4) 高度な介護技術を習得させるための指導法の研究

ソリューションフォーカスの視点は、高度で応用的なものであるため、その獲得のためには、上述した(1)～(3)で研究してきた基礎的基本的な知識・技術技能や「利用者本位の介護」の視点が十分に習得されていることが前提となる。

しかし、3年間で生徒たちにより大きな刺激を与え、福祉や介護への興味関心を高め、より意欲的な態度を育てるためには、同時に高度で応用的な介護技術に触れさせることも重要であると考え、以下の取り組みがどのように生徒の興味関心を高め、意欲の喚起や成長に関わっていくかを検証した。

①「楽ワザ」介護

京都市にある有限会社「ケアプロデュース R X組」の「楽ワザ介護塾・紫野庵」と連携し、年4～6回の指導を実施する。教員自身も技術講習を受け、生活支援技術等の指導に活かしていく。「楽ワザ」介護は、利用者にとって負担の少ない介護技術で、「利用者本位の介護」の視点にも通じていることから取り入れている。利用者が「楽」になる介護であり、介護者自身の負担も少ないことは、これからの介護現場で主流となる視点ではないかと考えている。

②介護コンテスト(昨年度までの介護技能コンクールを名称変更した)

本県の介護コンテストは、福祉系高等学校において習得すべき技術内容が示されているAJCC(オールジャパンケアコンテスト:全国福祉施設介護技術コンテスト)に基づき実施している。本コンテストの参加により、「より良い介護」や優勝を目指して仲間と協力しながら頑張ることで、授業だけでは得ることができない技術力や仲間との絆などを得ることができると考えている。評価や感想文を通じて、その事業の成果や課題を検証していく。

③現場見学実習や講演会の実施

- ・リハビリテーションセンターへの見学や、最新介護技術あるいは福祉用具の見学、また新しい介護福祉施設等の見学を実施することで生徒の知見を広めていく。
- ・福祉や介護に関わる大学教授や施設関係者等の専門家を招聘し、講演会を開く。

5 研究の成果と課題

○評価方法及び実施上の成果

<評価方法>

研究事項(1)については、介護の技術・技能の達成度を測定するための評価表を作成した。介護実習前と後に自己評価を実施させ、技術・技能の到達度について、レーダーチャートを活用することにより、強みと弱みを把握することができ、授業や指導の改善に繋がった。また、施設指導者にも同様の評価をしていただくことで、客観的な評価として生徒自身の振り返りにも繋がった。また、この評価法を巡り学校と施設との連携が深まるだけでなく、SPH事業への理解も深まり協力関係が強まった。

さらに、ICFの視点に立つケアワーカーを育成するために、5つの観点(①見る・聞く・話す、②アセスメントの重要性の理解、③介護実践を振り返る力、④協働する力、基本的な知識・技術)から構成される評価表を作成し、自己評価を行った。やはりレーダーチャートを活用することで、現段階での生徒の強みと弱みを把握することができ、形成的評価として教員の指導の改善に繋がった。

研究事項(3)の医療的ケアについては、(1)と同じ「生活支援技術」科目の1分野であるが、教授できる教員(講師)が看護師資格を有し研修を受けた者しか授業することができないため、独立した評価法を確立する必要があると考えた。特に、この医療的ケアは、本来医師や看護師が行う「業務独占」の分野であり、介護福祉士にとっては非常に高度で危険を伴う医療技術であるといえる。しかし、逆に言えば、この分野に自信を持てるケアワーカーを育て上げることは、本人の大きな自信となり、現場においては有為な即戦力となるだけでなく、若くして介護のリーダーとなりうるということだ。このような理由から、医療分野の専門的な知識や技術に焦点を当てた評価表を作成して、自己評価(チーム内評価)を実施した。今後この評価表を改善しながら、次年度にまたがって継続的な評価を行うことで、生徒の成長を検証していく予定である。また、全授業時間の終了において、「授業アンケート」と感想を記述させながら、教員の形成的評価として指導改善に活かしている。

研究事項(2)(4)については、行事実施後のアンケートや感想文により、評価している。コミュニケーション能力の向上や自己肯定感や自己有用感に繋がっているか、チームや他職種の人たちと協働できたか、生徒自身の成長に繋がり福祉や介護への自信や誇りに繋がっているかを評価した。

<実施上の成果>

・研究事項(1)において、まず、主体的かつ協働的に課題発見や課題解決や表現していく力を養うために、全校的な取り組みとして、「アクティブラーニング」手法を取り入れた。SPH校内研究員にアクティブラーニングを担当させ、各種研修会に積極的に参加させると同時に、校内での授業研究を数回にわたり行った。全ての教科において、アクティブラーニングを取り入れていこうとする雰囲気広がっている。

次に、「生活支援技術」と「介護実習」と「介護過程」という科目が、ICFの視点に基づいた介護技術・技能の観点において、また「利用者本位の介護」への意識の転換という観点において、3科目が連動して教授されていくべき科目であることから、評価法の検討を行った。本年度ようやく介護技術・技能分野での評価表とICF観点別評価表を完成させることができた。今後は、これをもとに、生徒の技術到達度や成長の度合いを測定することができ、研究の検証を進めることができる。こうした評価表を考案し作成すること自体が、教員の意識改革に繋がり、生徒をどのように成長させていくかの方向性を見つめ直すきっかけとなったことは、本研究の1つの大きな成果となった。まだ評価が始まったばかりではあるが、生徒の成長が表出していることがわかる。

さらに、より効果的に授業展開ができるようにICT(タブレット)を活用した授業方法も取り入れたことで、動画による振り返り効果や授業時間外での予復習が可能となったことで、校内実習での授業時間が多く確保できるようになり、かつ生徒の自主的学習も進むこととなり、それが技術等の向上に数値で表れてきている。

・研究事項(2)においては、「チーム」「協働」に焦点を当て、その土台となるコミュニケーション能力

の向上を目的としているだけでなく、仲間と困難な課題に立ち向かっていく力や他者の意見を尊重できる態度を養っていくことを目的に各行事を実施してきた。これまでは、ルーティンな行事として実施することが目的になってしまっていたが、生徒の自信や成長につながるために行事を実施するということが教員自身が再認識する機会となったことは大きな成果であるといえる。また生徒においても、「ありがとう」や「助かる」等の感謝の言葉を、外部の多くの方々からいただくことで、自己有用感や自己肯定感が高まり、自らの自信にだけでなく福祉職や介護職への強い誇りになっていることが感想文からも読み取れる。また、本校他学科との連携や協力体制も深まった。

・研究事項(3)では、教員免許を持たず、大学等においても教科教育法等を学習していない指導者が、授業担当者としてシラバスや学習指導案を立案し、研究授業を行うことは、とても大変なことであったが、授業アンケートや感想文を毎時間実施し、形成的評価として取り入れることで、指導者自身の成長に大いに繋がったといえる。また技術・技能評価表を作成しかつ改善を繰り返すことで、より生徒の実態に即したものにするとともに、評価表を常に改善することで指導者や教員の指導力向上に繋がっていったことは研究の大きな成果であるといえる。生徒自身も、この「業務独占」分野である医療的ケアの技術や技能を習得し自信をつけることが、今後介護現場において、大いなる戦力となるだけでなく、若くして現場リーダーとしての活躍が約束されていくということを理解できたようだ。単に技術や技能の上達や習得だけでなく、この生徒の「意識変革」こそが大きな成果であると考えられる。

・研究事項(4)については、この研究指定を利用して、普段経験や体験ができないような高度で応用的かつ先進的な福祉や介護分野の研究に触れさせることで、生徒により大きな刺激を与えることで、より強い学習意欲に繋げることを目的として、「楽ワザ」介護や「介護コンテスト」に取り組んできた。教員にとっても生徒にとっても、これまでとは違う視点の介護技術に触れることは、感想文からも大きな刺激となっているようだ。また、地域の福祉施設も少しずつこうした「利用者本位の介護」の視点を取り入れた介護技術を導入し始めていることも教員や生徒のモチベーションを上げることに繋がっている。

○実施上の問題点と今後の方向性

・研究事項(1)は、ようやく評価法が作成されたので、今後順次自己評価や指導者評価を積み重ねながら、生徒の成長度合いについて検証していく必要がある。まだ昨年度1年間の評価がないことが大きな問題点であるが、評価表や教材の改善を繰り返し、生徒の実態に即したものに修正していくことが重要であると考えられる。ただ、教員はマトリックス的な多くの業務を抱えているため、十分な教材研究の時間が取れていないことは、大きな問題であるといえる。そうした中でも、次年度はICFの視点に基づく教材作りを一層進め、かつ他校でも活用できるように指導書(ガイドブック)の作成を勧めていきたい。

・研究事項(3)は、「生活支援技術」科目の1単位分として実施しているが、授業時間数の確保が何よりの課題である。学校行事や科行事等で、実質時間数が確保されず、始業式や終業式、7時間目後にも補充的な授業を行うなど、時間数確保に大変苦勞している。また評価表で到達度を測定しているものの、実際現場でどれほどの戦力になるのか、また本研究の成果として生徒がどれほどの実力と自信を有することができるのかは、数値からだけでは検証できないのではないかというジレンマもある。こうした中ではあるが、次年度は、多くの学校で活用されることを目的とした医療的分野の指導書(ガイドブック)を少しでも作成していきたい。

・研究事項(2)と(4)については、行事的な側面が強く、内容を精選しながら、次年度も継続実施していきたい。